

特集

ファンタジーの 読み方のつぼ

教科書には、中学年を中心に、ファンタジーと呼ばれる文学教材がいくつか位置づけられています。しかし、ファンタジーをどのように読んでいけばよいか、指導に悩む先生方も多いと聞きます。

ファンタジーのおもしろさは、どんなところにあるのでしょうか。言葉の学習として、どんなことを学ぶ取ることができるのでしょうか。対談と実践紹介を通して糸口をつかめたらと思います。

★ファンタジーはおもしろい

対談

作家
岡田 淳

鹿児島大学教授
上谷 順三郎

多くのファンタジー作品を生み出してこられた岡田さんと、文学教育を研究テーマとされる上谷先生に、ファンタジーのおもしろさ、国語の授業の中での楽しみ方について語り合ってくださいました。

ファンタジーって、
何だろう

岡田 僕の作品は「ファンタジー」と呼ばれることが多いけど、「ファンタジー」って、よく分からない言葉だなあと思っています。僕は、龍が出てきたら「これはファンタジーだろう」と思うでしょう。では、ローベルの「お手紙」はどうか。カエルは、現実では話をしたり、手紙のやり取りをしたりはしませんよね（笑）。現実には起こらない話をファンタジーと呼ぶなら、こういう話もファンタジーなんじゃないかと、分からなくなってくるんです。

上谷 ファンタジーについて、みんながある程度、共通してもっている捉えとしては、『現実と非現実の境目にある』とか『現実と非現実とを出入りする』という構造をも



つ」ということがあると思います。動物が話したり手紙をやり取りしたりしていても、それだけではファンタジーとは呼ばないんですね。

岡田 不思議な話には、今おっしゃったような、現実と非現実とを行ったり来たりするものだけでなく、現実の世界に何か「異界のもの」が入ってくるものもありますよね。例えば「メアリー・ポピンズ」とか、僕の作品では『びりっかすの神様』とか。こういう、日常に起こる不思議を描いたものは、日常と地続きになっているからファンタジーと呼べるのかそうでないのか、僕には境界が分かりにくいんです。

上谷 ご自身では、あまり区別せずに書かれているんでしょう。

説明のしきれないものをどう読むか

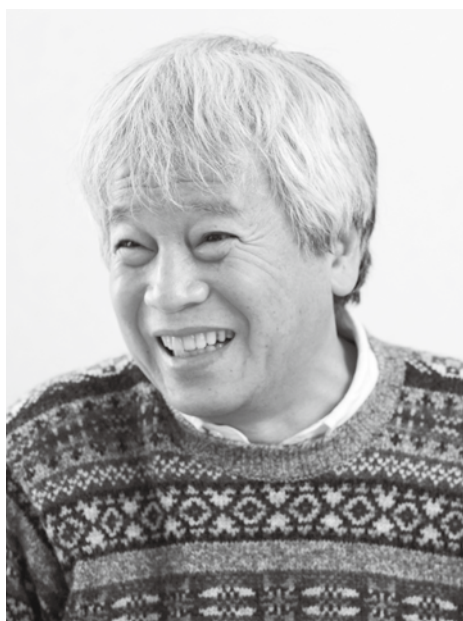
岡田 書くときには、「不思議な話を書こう」とは全く思っていないですね。普通に書いていたら、ファンタジーと呼ばれる話になっちゃったという感じです。例えば、『ムンジャクンジュは毛虫じゃない』という話があります。僕の初めての作品です。子どもたちが学校や山に行くんですが、それは

思うんです。

楽しめればいい

上谷 みんながファンタジーをおもしろいと思っているのは確かなので、「とにかくおもしろがる」でよしとするなら、それで授業を終わるのも一つの方法ですね。

岡田 僕の中では、「楽しめればいいんじゃないか」というのがありますね。「読んでいて楽しい」「この部分に心ひかれる」と感じられたら、それだけで、十分その物語は読み手の役に立っている、何かをもたらしていると思うんです。だから、分析的に、「なぜそう感じるのか」などと考えるのは、必ずしもよいことではないような気がするんですよ。例えば『ふしぎの時間割』という本の中に「ピータイルねこ」という話があります。「黒猫が、色を媒介にして、みどりという、外に関わることにものすごく消極的な子どもの世界を広げていく」という話——こう言葉にしてみましょうと、「そう思って書いたわけじゃないんだ」と言いたくなってしまふ（笑）。「こうなったらおもしろい」というのを積み重ねながら書いて、ああいう話になったんです。もちろん、後から読んで、みどりが世界を広げていっ



おかだ じゅん
岡田 淳

1947年、兵庫県生まれ。神戸大学教育学部美術科を卒業後、図工専任教師として小学校に38年間勤務。その間から斬新なファンタジーの手法で独自の世界を描く。『放課後の時間割』（日本児童文学者協会新人賞）、『学校ウサギをつかまえる』（同協会賞）、『雨やどりはすべり台の下で』（サンケイ児童出版文化賞）、『扉のむこうの物語』（赤い鳥文学賞）、『こそあどの森の物語』シリーズ（野間児童文芸賞）など、受賞作も多い。

リアルな世界でありえることです。でも、そこにムンジャクンジュという、ありえない生き物が登場するところから、この話がいわゆるファンタジーっぽくなってくる。他の作品もそういう調子で書いていて、その後、何作目かに『学校ウサギをつかまえる』を書きました。これは、不思議な物事が出てこない話なんです。「どんな話がおもしろいか」と考えたときに浮かんできたものを形にしたらそうなった。そういう意味では、二つの作品は、僕の中では変わりはないんです。僕は、自分の作品を「物語」という言葉で捉えているんです。僕の中で、「物語」とは、現実から飛び上がって現実に着地するというもの。二つの作品の違いは、その「飛び上がる高さ」の違いだけなんじゃないかという気がしていますね。

上谷 確かに、そうかもしれません。ただ、

たことはすてきだなと思う。でも、そのために書いたわけではないし、そう言ってしまうと、あのすてきさがなくなってしまう。このあたり、国語の授業というものと、ファンタジーと呼ばれる話との接点に違いがあるような気がするんですね。

上谷 なぜ「黒」と「緑」だったのかとかいうことを分析してもしかたがないところがありますね。「たまたまそういう設定なんだ」と思うことで入っていける世界ですからね。

読んだ後にやり取りすると楽しい

岡田 ある学校の先生に、「『ピータイルねこ』の黒猫が、僕の理想の教師像なんだ」って言ってもらったことがあります。

学校の授業の中で読むときには、「ファンタジーであるかないか」によって、指導のしかたを違えるということはあるかと思いますがね。つまり、例えば「白いぼうし」（四年上）に出てくる「白いちよう」のような、説明のしきれないものがあつた場合にどう読んでいくかということです。この「白いちよう」が女の子なのかどうかといったことは、書かれていないので分からないわけです。「どう考えるのが正解か」という読み方をして、行き着くところはない。それが、「ファンタジーをどう扱ったらよいのか分からない」という学校の先生方の声に結び付いているのでしょう。解決できないよく分からないものをファンタジーだと捉えることができれば、「この仕掛けに着目すると、なるほどと思える読み方ができる」などということが見えてくるだろうと

遊びに付き合うことで、子どもの世界を広げていく、そういう関わり方をしたいんだということなんでしょう。「そういう読み方もあるのか」と思いましたよ。読んだ後のそういうやり取りは、会話としてとても楽しいことですよね。あるいは、どんなものを何色と見るかということを話題にしてもいいかもしれません。人によって全く違つてきそうだし、教室で聞いたときに「あいつはそういうふうに通んだんだな」と思えるでしょう。そういうやり取りというのは意味があることだと思うんです。

上谷 そうですね。人には好き嫌いがあるというのを知ることにも、好きな理由が違ふんだと知ることにも意味があります。そういうことを話題にできる入り口がたくさんあるっていうのが、ファンタジーのよいところかもしれないですね。現実と照らし



かみ たに じゅん さぶ ろう
上谷 順三郎

1962年、鹿児島県生まれ。鹿児島大学教授。国語科教育の中でも特に、読むこと、教育、文学的文章の授業、読者中心の文学理論を専門とする。著書に、『読者論で国語の授業を見直す』（明治図書）、『読者論』に立つ読みの指導、『国語教育研究の現代的視点』（ともに共著、東洋館出版社）などがある。

ありえない世界を、 納得できる形で示す必要がある。

上谷



合わせて、「ああ、そんなことじゃ生きていけないよ」という話にはなりませんから（笑）。

岡田 そうそう。「僕はこうなんだ。君はそうなのか」とできるのは楽しい。

上谷 「こういうふうには思わなきゃいけない」ということがないので、それぞれの考え方や体験を共有できるよさも、ファンタジーにはあるということですね。

岡田 そう思います。

仕掛けを読み取る おもしろさ

上谷 読んで「こう考えた」というのをやり取りしながら学習していくときに、文章の分析・解釈をしてもおもしろい作品というのはあると思うんです。

岡田 そうですかねえ。

上谷 岡田さんの作品は、分析していてもおもしろく読んでいけると思っています。変な言い方ですが、ありえないと思うような世界に読み手が入っていけるためには、それが納得できる形で示されていることが必要なんです。岡田作品にはそれがあ

る。その「納得できるように書かれている」という部分が、分析できる場所だっていうふうにいるんですね。

岡田 破綻がないようにという意識はあるかもしれませんが。

上谷 ありそうにない話なのに、なぜ読み切れたのかと振り返ったときに、「この設定で、こう考える人がこう行動するのは分かる」と、自分が説得されていた理由が分かるというのは、おもしろさの一つかもしれない。とことん分析しても整合性が保たれている、絵に描いても矛盾なく再現できるなど、「分析するとおもしろい！」

不思議を描く仕掛け

岡田 『ふしぎな木の実の料理法』をはじめとした「こそあどの森の物語」シリーズは、本当にはない不思議な世界の話なので、それをどう、ありそうに作り上げるかっていうのには気を遣いますね。

例えば、今日、このビルの玄関のところであつたことですが……レンガ色の壁があつて、下はこげ茶色の石が敷かれてい

ないところに連れていく。そういうところは意識しています。

上谷 先ほどおっしゃっていた、「飛び上がる高さ」の違いによって、その意識のしかたは違ってくるんですね。

岡田 そうですね。短編であれば、わりと一足飛びに行けるんですけど、そうでなければ、丁寧に積み重ねていきます。例えば「ピータイルねこ」であれば、まずリアルなところから、みどりがいやだと思っていること、「緑色という色に関わって、なんとか外の世界とつながっている」ということをできるだけきちんと書きます。だから、黒猫が黒いタイルを飛び飛びやってきたときに、猫がしゃべることを疑問に思わずに、みどりと色の関係ができていくんです。「飛び上がる前」のリアルな現実の部分をしつかり書くことで、「飛び上がる高さ」が保証されるみたいなのところがあ

りますね。まあ、書くときにはそれほど分析的には考えてはいませんが、思い返すとそうかなというところですよ。

上谷 ご自身の作品を読み返されるときには、そういった仕掛けのことは意識されるものなんですか。

岡田 意識しないですね。中に入つてその世界を楽しむという感じですよ。もちろん「あざとい」仕掛けについては、少しは意識しますよ（笑）。例えば、『放課後の時間割』に「すると、雪がふりだした」という話があります。「すると、雪がふりだした」というキーワードが出てくる物語を作るという課題を与えられて、ネズミが作った話です。でも、冒頭で空中にはり付いたように雪が止まってしまう。「どうなるの」と思ううちに話に引きずり込まれていって、終末、キーワードの一文とともにまた雪が降り始める。自分でも「あざといな」と思

みんなが必ず思っていることを積み重ねて、ありえないところに連れていく。

岡田



います(笑)。こういうものは読み返しても、もう引つ掛かりはしませんよね(笑)。

「語り」の効果

上谷 仕掛けに加えて、文章で読むときに大事なのは、「語り」だと思うんです。映像や絵がない分、仕掛けが生きるかどうかは「語り」しだいなので、そこは、かなり工夫されているはずです。国語で学習する場合、それは意識したいところです。「語り」には三タイプあると思います。一つは、語り手が紙芝居を語っているような、人物の行動も気持ちも全て分かるという全知的な視点をもつタイプ。それから、脚本のト書きのように、人物の行動を客観的に眺めるというタイプ。そして、これらの中間にある、人物の一人に焦点を当てて寄り添い、その行動や気持ちを語るといふ三人称の限定的な視点というタイプ。岡田作品は、多くが三人称の形を取っていますね。

岡田 「ピータイルねこ」だと、みどりに寄り添った視点で書いているけれど、「私は」という書き方はしていませんね。神様がみどりの肩の上に乗って語っているみたいな感じなんでしょうか(笑)。

上谷 そうですね。その距離が離れすぎて

いると、「これは空想の話だな」となってしまう。適切であれば「こんなことがあるのかも」と思いながら読んでいける。その距離感は重要かもしれません。

岡田 そのあたりはわりと気を遣っているところだと思っています。実は、『選ばなかった冒険』という話では、寄り添う人物が、章ごとに男女で入れ替わっていくんです。だから、読み手は、男の子の気持ちも女の子の気持ちも分かると感じるでしょうね。書き手として、そういうたくらみはありますよ。ただ、読むときにそんなことを考えられると困ってしまう(笑)。

上谷 「飛び上がる高さ」が高いとき、その世界にうまく踏み出させてくれる「語り」が、岡田作品にはあると思っています。それは、読み手の子どものことをかなり意識していないと生まれないものです。「これなら信用してついてきてくれる」というイメージがあるんでしょうね。

岡田 自分では分析できてはいないけれど、そうなんでしょう(笑)。子どもと「かくれんぼ」をすると、本気でわくわくしながら隠れている自分がいるんですよ。それがとても楽しい。おそらく、そういう気持ちで書いているんだと思いますね。

上谷 「おもしろがる」という思いが根っ



こにあるんですね。国語では、言葉の学習のために分析的に読むことが必要とされる部分があるのは確かです。そう読んでもおもしろいものはありますしね。ただ、「そんなふうに読むとおもしろくなる」という書き手の気持ちもよく分かります。それを受け止め、「おもしろがる」ということは忘れないでいたいですね。今日はどうもありがとうございました。

岡田淳さんの本

対談で話題に上がった、岡田さんのファンタジー作品をご紹介します。



ふしぎの時間割

偕成社／定価1,000円＋税

いくつかの小学校を舞台とし、そのそれぞれの時間に起こる、本当にありそうでなさそうな出来事を、時間割のように集めた物語。1年生の女の子・みどりの前に、不思議な黒猫が現れる「ピータイルねこ」を収録。



ムンジャクンジュは毛虫じゃない

(偕成社文庫)

偕成社／定価700円＋税

たたりの言い伝えがある不思議な山、クロヤマから持ち出された花と「ムンジャクンジュ」という不思議な存在。それをきっかけに、子どもたちの日常に大騒動が持ち上がる15日間を描く。



びりっかすの神様

(偕成社文庫)

偕成社／定価700円＋税

4年生の始が転入したのは、成績順で席が決まるクラス。そこで出会ったのは「びり」になった子にだけ見える「びりっかすの神さま」。不思議な存在、「びりっかすの神さま」によって、クラスが変わっていく。



選ばなかった冒険

(偕成社文庫)

偕成社／定価700円＋税

6年生の学とあかりは、ある日、学校の階段から、ロールプレイングゲームの世界に入り込んでしまう。ゲームの世界で眠ると現実へ、現実で眠るとゲームの世界へと、二つの世界を行き来しながら進む冒険の物語。



放課後の時間割

(偕成社文庫)

偕成社／定価700円＋税

学校ネズミは、学校に住み、人間の言葉を話す。ある日、小学校の図工の先生「ぼく」の前に姿を現した学校ネズミが、学校にまつわる物語を語り始める。不思議な存在が語る、不思議な話が折り重なった物語。



ふしぎな木の実の料理法

理論社／定価1,500円＋税

「こそあどの森」シリーズ1作目。「こそあどの森」のスキッパーのもとに届いた謎の木の実「ボアボア」。その料理法をめぐり、森のみんなが知恵を絞る。不思議な森の住人が繰り広げる物語。